

## 第4のレンズ

- 大学における政策，実践，組織を評価するために -

Randy L. Swing

(アメリカ初年次教育政策研究センター)

司会 最初に Randy L. Swing 先生から Assessing Institutional Policies, Practices, and Structures 「第4のレンズ - 大学における政策，実践，組織を評価するために - 」というタイトルでお話をいただきます。先生はノースカロライナ大学を卒業された後，ジョージア大学で修士と博士号を取得されています。特に1999年から20年間にわたってアパラチアン州立大学で初年次教育プログラムを担当されています。現在はアメリカのノースカロライナ州プリバードにある初年次教育政策研究センターの所長を務めておられます。初年次教育，学生調査についてアメリカでも第一人者の先生でございます。有益なお話を聞かせていただければと思います。よろしく申し上げます。

Swing 氏 皆様，こんにちは。このように本日，シンポジウムに参加させていただきまして光栄でございます。まず山田礼子先生にお礼を申し上げたいと思います。山田先生にご紹介いただきまして日本を訪れることができました。彼女の，高等教育を日本において改善していこうという仕事に加わらせていただいています。私も日本の高等教育に触れることによってプロとして成長できたと自負しております。日本の教育者の方々に知識を共有してくださった方々，今回，また過去においてお会いした方にお礼を申し上げます。

今日の私の話が，現在も進行中の情報の交流に貢献でき，私たちの共通の願いである，すべての学生の学習，成功に貢献できればと思っています。今日の話のフォーカスは大学の改善プロセスについてです。そして品質保障のプロセスを通しての改善プロセスに関しても焦点を当てたいと思います。アメリカではアセスメントが(査定や評価と言いますが)，品質保障の同義語として使われています。今日の話では両方の用語を使わせていただきますが，混乱を避けるために学生の成績の評価の話はいたしません。このプロセスもまたアセスメント，査定や評価と多くの国では呼ばれていますが，今日の話では大学の改善の話のプロセスをさせていただきます。

まず私の高等教育への情熱について述べたいと思います。高等教育が人の将来を形づくる力，社会，地球上で共有する生活を形づくる力をわたしは信じております。この情熱をご理解いただくため自分のことを話させていただきます。私は低所得の家庭で育ちました。父は小学校の3年生までしか教育を受けていません。母は高校を中退しました。そんな私にとって大学は広く新しい世界を開いてくれました。大学教育を通じて，人の役に立つパブリックサービスの人生を築くことができました。高等教育は私の人生で大きな意味を持っていましたので，私もまた最良のチャンスを大学教育で受けたいという，すべての学生に対して大学が

貢献する手助けをしたいと思います。この熱意をぜひご理解ください。

すべての大学生の成功をという熱意は、アメリカにおけるアカウンタビリティ運動と歩調が合っています。これは大学が学生の成功に関して責任をとるように促すものです。これは大学が、その学生の成功に関して責任を取るように促す運動です。しかし学生が失敗してしまいますと、従来、これは主に学生本人のせいであるとされてきました。大学としては言い訳がしやすかった訳です。学生は十分勉強しない、あるいは入学の時点で学力が低かったというようにさまざまな理由で学生は失敗したと説明をします。日本でも同じような状況でしょうか？ 大学によっては学生の多くが学位を取得することなく中退してしまうことを誇りに思っていました。これは大きな誤解であったといえるでしょう。つまり、学生を大勢中退させることが大学の卓越性の現れであるとみなしていました。このダーウィンのような考え方、すなわち、強い学生が生き残り、弱い学生が失敗するという考え方は高等教育で学生が失敗するのは学生の責任だという考えを示す好例でしょう。しかし、このような考え方のもとでは、大学が学生のニーズを満たすという責任は果たせません。

実はアメリカではこうした風潮は既に変わりつつあります。主に高等教育において品質保障の試みが存在するからです。ほとんどのキャンパスにおいては積極的に大学の方針や組織を改善していきたい、実践も改善していきたい、そうすることによって学生の成功の度合いを高めていきたいと考えています。アセスメントが最もよい形で現れますと、既存の実践がそのまま良いと確認するか、あるいは、アクションを引き起こすことにつながります。言い換えますとアセスメントが効果的なのは、唯一、それがアクションを引き起し、既にうまく機能しているものを、そのまま続くようにする、あるいはキャンパスが変更のイニシアティブを引き起こすようにした場合のみです。そして現在のアメリカの高等教育の状況は4つのレンズの結果であると提案したいと思います。

研究者はこのレンズを使って学生の成功と失敗の説明を試みてきました。第一のレンズはインプットの特性のレンズです。研究者はなぜある学生は成功、ある学生は失敗しようとするのかの説明を試みて、学生の入学時の特性がその成績、卒業まで残るかどうかの予測要素であると導き出しました。高校の成績、大学の入学試験の成績はこれから先の大学で成功するか否を予測する大きな要因です。しかし学生の姿勢や態度、行動、それまでの経験、そして社会経済的なステータスもまた、一連のインプット特性として確立されました。これらの特性が学生としての成功に貢献したり、障害になったりしたわけです。アレクサンダー・アスティンをリーダーとして、アメリカの大学は大規模な測定プロジェクトを行いました。大学生をインプット属性ごとに追跡したわけです。この調査に関しては後ほど Pryor 氏からお話しいただきます。学生の入学時の特性が大学における成功にどのような相関関係を持つかを理解することは重要です。しかしこれを悪用することもできます。成功するという予測要因を特性として持っている学生のみを入学させるような大学も出てきました。大学間で最も才能のある学生を入学させようとする競争が激化し、経済力のある大学が学生の才能を買い取ることができるようにさえなりました。具体的には、授業料の割引、学習援助パッケージを通してです。その結果として大学は学生確保に投資をしているのですが、平均的な学生の

ニーズを満たすだけでなく、成功する可能性の高い学生を求めようになりました。よくあるリサーチの実践として大学がいかに厳しく学生を振り落とすかについてグループ分けをするというやり方があります。例えば、ACT, American College Testing などその代表的な例ですが、学生が卒業まで残るかどうかが、いかに厳しく振り落とすかの度合いを分類して追跡をしています。こうした結果、選抜性の高い大学は同質性が高くなりがちです。同じようなバックグラウンドの学生を入学させた結果です。学生の多様性が欠けている場合には、認知能力の発展、伸びを抑えることにもつながります。高等教育の著名な研究者であるアーネスト・パスカレラ博士が20年来の研究成果として、多様な人々と接することは学生の重要な思考能力の伸びと関連性があると報告されています。しかし最近、高等教育通信が報告していますように、米国の多くの著名な大学が城砦キャンパスとなっているようです。つまり社会的、経済的ステータスの高い家庭出身者のみに開かれている高等教育機関となりつつあるようです。

一方で、インプット特性のおかげで学生のことをよりよく知ることができるようになり、彼らに役に立つように大学側が準備できるようにもなります。しかし残念ながら入学プロセスにおいても、学生のインプット要因に頼りすぎてしまったので、高等教育は分割されてしまいました。そして選抜性の高さが大学の質と混同されてしまっています。

第二のレンズについて説明します。これは外部の環境、外部の状況です。1970年代において研究者が魅了されたのは、大学の直接的なコントロール下にあるわけではないが、しかし学生の成功にインパクトのある要因です。大規模な研究が焦点を当ててきたのは、州、連邦の政策、地域の認定機関など外部評価、地域間の格差、経済的な格差の影響に焦点を当ててきました。この研究が火種となりまして連邦の学資援助政策の議論が活発になりました。そして新しい法律もできました。中所得家庭の学生のサポートもこのおかげで増えました。この研究の柱となったのが人種差別、人種隔離の歴史的なインパクト、そして黒人向けの大学としてつくられた大学、主に白人向けの大学の間に残った違いにフォーカスした研究です。このおかげで大学の政策に関して裁判所から命令が出て変化がおきました。現在も連邦機関が監督を続けているものもあります。多くの大学は環境の精査を行うようになりました。これを通してチャンスや脅威となるような部分の改善を戦略的な企画プロセスの一環として特定するようになりました。そしていかに外部の状況が学生に影響を及ぼすか、この認識を高めるのは適切です。しかしこの情報を使って大学のパフォーマンスがよくないことの言い訳にするのは適切ではありません。州議会、連邦機関、議会のせいであるというのは、これはいわば重要な、有用な情報が悪用されて、大学が自分の学生の成功の責任をとっていない例かと思います。

第3のレンズは学生の関与の度合いです。この第3の研究のテーマは、学生の高等教育機関への関与の度合いにフォーカスしています。この研究で中核となるのは、学生が大学時代の時間をどのように過ごしているかという点です。ロバート・ペイスがこの研究の草分けとなりました。1999年にジョージ・クー、インディアナ大学教授のおかげで大規模な調査研究が開始されました。この調査は全米学生学業関与調査(NSSIE)と呼ばれていますが、学

生から直接データを収集します。彼らが大学の1年生，3年生の間にどのように時間をすごしたかに関するデータです。学生がいかに学生を厳しく振り落とすかについては，どの大学であっても学生の関与の度合いの一部を説明できます。オープンアドミッションタイプの大学は不利な立場にあると思われます。なぜならば，この大学の入学者の学生を見ると，今までの学校において成功が低かったあるいは中くらいであった学生の割合が高いからです。この関与のデータから判断しますと，学生が成功するのはより長い時間，勉強した場合，課外授業，課外の学習のチャンスにより多く関与した場合です。

そしてこのデータを使って，大学は学生が十分に大学の経験に関与していないと学生のせいにしてしまいがちですが，重要な結果としてはさまざまな大学に同質の学生が通っていても，学生の関与の度合いにはかなりのばらつき，幅があります。この結果から言えることとして，大学のアクションが直接的に学生の成功に貢献していると言えるかと思えます。

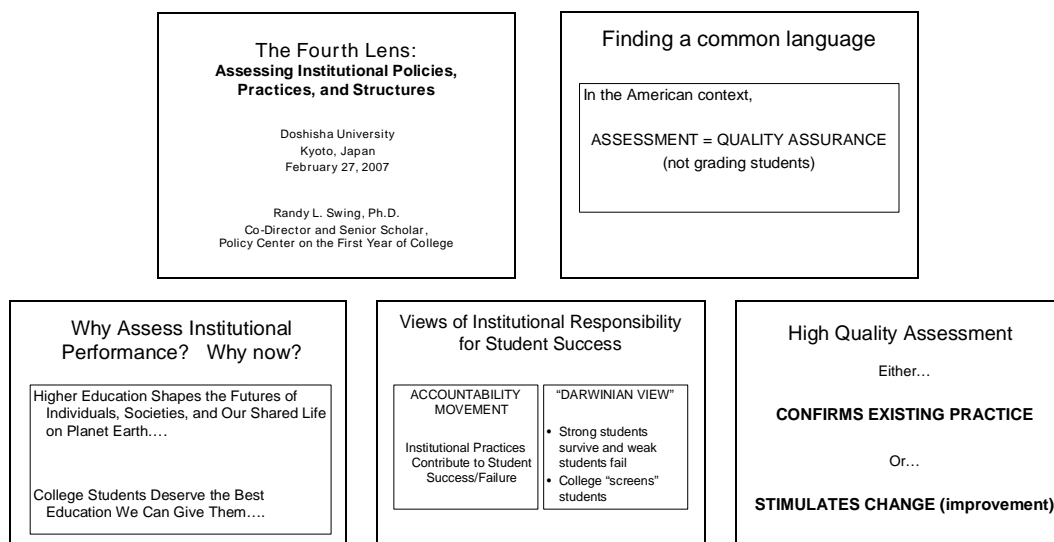
これらの結果から4つ目のレンズが導きだされます。大学に関連する第4のレンズです。1999年に，初年次教育政策研究センターのジョン・N・ガードナー氏のもとで考案された，新しい技術で大学の成功の度合いを評価するためのツールです。当初，この研究センターは新しい調査をつくりだすことに焦点を当てました。1年次の実践のデータを収集し，そして教育者の開発活動でも実験しました。これによって新入生の特別なニーズに関する理解を高めようとしてきました。このプロセスを通じて最も困難だったことは，測定結果を大学の変化に繋げにくいということでした。大学はデータを無視しているようでした。データを意思決定に活用し，改善につなげてくれませんでした。日本ではいかがでしょうか？そこで政策研究センターはアセスメントの計画を立てました。この計画のなかで，草の根的サポートを大学の改善に関してつくりだす必要を強調しました。単に現在のパフォーマンスを測定するだけのアセスメントではないと主張したのです。Good Practiceの原則をもとに，この新しい査定計画はすべてのステークホルダーからのインプットを含んでいました。そして大学を変えていくためのアクションプランに密接に繋がっているという，今までの方法論とは違うものでした。今までの方法論はなかなか継続的な大学の改善に繋がらなかったのですが，この新しいアセスメントは4つの構成概念から成り立っています。

第一に，このプロセスは大学の教職員，スタッフ，学生の持つ知識を使い，大学のパフォーマンスを強化していくことに頼っています。外部のコンサルタントには頼りません。第二に，このプロセスは，定性，定量両方における複数の証明となる材料を要求しています。そして唯一の調査や唯一の知識テストに焦点をあてることはしません。第三に，このプロセスは向上的な願望的な初年次学生向けモデルをもとにしています。現在よくあるプラクティスと比較するものではなく，プラクティスのスタンダードでほとんどの大学がまだ現在，達成できていないものといえるでしょう。そしてこのプロセスは唯一大学が何をしているかに焦点を絞っています。つまり，大学が何かをするかではなく，大学の政策，実践と組織に重きを置いています。さて大学が，彼らがコントロールしていることに焦点を当てた場合，その大学の政策，実践，組織にですが，そうなると責任をとらなくてはなりません。大学がいかに学生の成功，失敗に貢献しているかについての責任です。このレンズで見るとは大学が変


化を支援していることが大前提としてあります。しかしこれは彼らがその変化の企画に参加していた場合のみに適応されます。現在、92の高等教育機関が、この新しいアセスメントに参加しています。このプロセスの効果に関してはまだまだ調査中ですが、かなり大学における変化が見られるようになってきました。アクションプランも実践されています。大学はリソースの配分に関しての大きな変化を報告しています。そしてかなりの変化が政策、組織に関する報告もされています。

以上、私は4つのレンズを提示させていただきました。これは大学の成功、そして失敗を調べるために使うものであり、これらのレンズのそれぞれが高等教育に関する膨大な文献や研究に貢献しており、私たちの理解を深めてくれています。大学生をいかに支援し、意欲をかきたて彼らの学習と成功を高めることができるかについての理解です。ここで、最初の疑問に戻りましょう。もしアセスメントが成功しているか否かの判断は、どれだけ大学を改善させることかできたのかということであれば、最も重要なのは変化や改善の推進者をつくり出すということです。チームベースの評価モデルや、プロフェッショナルの判断、そして地域の知識に頼るもの、そして統計分析にはそれほど頼らないもの等がありますが、混乱の原因となるプロセスにもなりがちです。しかし目指すところが改善であれば、このようなプロセス、小単位のグループのディスカッション、さまざまなデータ源のデータを理解する、あるいは共同して計画を将来のアクションに関して立てることを通じて、これらはかなりの大学における変化を引き起こすことができるかもしれません。そして今現在、伝統的な手法、統計ベースの研究、アセスメントだけではできなかったことが可能になるかもしれません。

私は現在実施されている研究の信頼性について疑問を呈しているわけではありません。そうではなく、冷徹な事実だけでは十分に人をかき立てて、従来の実践を変えてもらえないかもしれないことに気づいていただきたいのです。そうではなくて、自分のストーリーを語ること、同僚と対話をもつこと、そして学生に成功してほしいという情熱を見せること、これら全てが強力なツールになりえます。大学を改善させ最終的にはすべての学生を成功させるツールになりえると思います。ご清聴どうもありがとうございました。



Research Lenses:

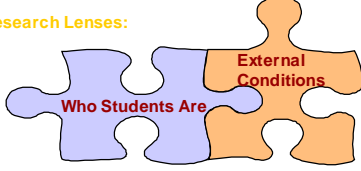


Who Students Are

Attitudes  
Prior Learning  
Skills  
Family Background  
More...

Input Characteristics

Research Lenses:



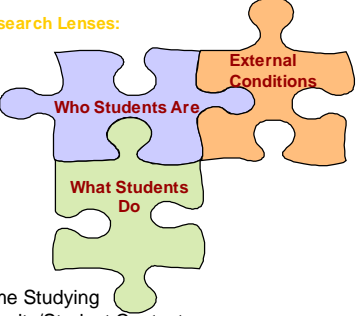
Who Students Are

External Conditions

Federal Policies  
State Laws  
Legacies (HBCU)  
Environments

External Conditions

Research Lenses:



Who Students Are

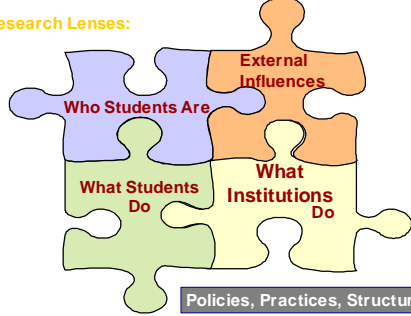
External Conditions

What Students Do

Time Studying  
Faculty/Student Contact  
Peer/Peer Contact  
More...

Student Engagement

Research Lenses:



Who Students Are

External Influences


What Students Do

What Institutions Do

Policies, Practices, Structures

Academic Policies, Reward Systems, Communications, Goals,  
Teaching Practices, Facilities, Hiring Practices, More...

Foundations of Excellence in the First College Year  
<http://www.fyfoundations.org>




Team-based assessment model

Designed to develop advocates for improvement

Four Core Constructs

1. Faculty/staff knowledge (locally focused)
2. Multiple sources of evidence
3. Aspirational – not comparison with peer practices
4. Focused on what the institution does



When institutions focus on what they control – their policies, practices, and structures – it is difficult to avoid taking responsibility for student learning and success.

High Quality Assessment  
Either...

**CONFIRMS EXISTING PRACTICE**

Or...

**STIMULATES CHANGE (improvement)**

Create Advocates for Student Success and Institutional Improvement

Contact Information

Randy L. Swing  
Policy Center on the First Year of College  
400 North Broad Street  
Brevard, NC 28712 USA

[swing@fyfoundations.org](mailto:swing@fyfoundations.org)

## アメリカにおける大学生調査と組織の改善

John H. Pryor

(カリフォルニア大学ロサンゼルス校高等教育研究所)

司会 それでは2番目の事例報告はJohn H. Pryor先生にお願いします。先生はバージニア大学をご卒業後、ダートマスカレッジで教育調査に関する学位を取得されています。その後、ダートマスカレッジで、Director of Student Affairs Planning Evolution and Researchの要職を務められ、現在はUCLAで二つの要職を務められています。一つはCooperative Institutional Research Program、大学関係ではCIRPと呼ばれています。インスティテューショナル・リサーチに関して大きな意味を持つ調査です。IRということで山田先生にも精力的に紹介していただいています。日本ではまだ親しみかなくもありません。IRという言葉も大学でまたよく知られるようになるのではないかと思います。もう一つはHigh Education Research Institute (HERI)という研究所の副所長です。

本日の企画に関しては山田先生をリーダーとする科学研究費プロジェクト「転換期の高等教育における学生の教育評価」のプロジェクトと同志社大学の教育開発センターが共催で行わせていただいています。山田先生をリーダーとするプロジェクトもここで使っております。CSSの日本版をいろいろな形で学生調査を実施する方法を研究されており、そのオリジナルバージョンのお話を聞かせていただけるかと思っています。

今日のタイトルは、Colleges Student Surveys and Institutional Improvement、「アメリカにおける大学生調査と組織の改善」というタイトルでお話をいただきます。それではよろしくお願いします。

Pryor氏 皆様、こんにちは。おいでくださいませして心からお礼を申し上げます。八田先生、皆様方にお出でいただきましてうれしく思っております。私の発表タイトルは「アメリカにおける大学生調査と組織の改善」となっています。この学生調査ですが、大学で、なぜこのような学生調査をするのでしょうか。調査にはコストも時間もかかります。データを示したとしても必ずしもその結果や判明したことに耳を傾けてくださる人ばかりではありません。ただ、経験からわかっているのは大学の学生の経験が情報として集まってくると、それによっては我々の学生や大学教育への理解が深まるということです。経験がわかれば、そこから学習ができるということです。学生の大学における経験を理解できることから、我々が実践していることをもとにして大学での経験を考えていきたいと思えます。まず、学生が入学してくる時にどういう状況であるかの理解が必要です。インプットの側面です。入学時の学生の特徴を知ることも必要でありましょう。

たとえば入ってくる学生の特徴は、その後続く大学生活に対して影響を与えます。たとえばCIRP研究結果を参照すると、ばらつきはあるものの、3分の2ほどが、入学学生の

インプット要因によることが多いことがわかります。大学での経験以上にそうした要因が大きな影響力を持っています。ですから入学してくる学生にまず目を向けることが必要です。学生は最終的に大学を卒業していくわけですが、入学時と卒業時とを比較して、自分の教育機関がどのような影響を与えたか、学生が何をもちってそこから育っていくのかということを考えることができます。

学生の大学入学前の特徴を捉えた上で、付加価値を付け加えることが大学の仕事だと思えます。付加価値はどういうことか。大学はすでに学生が今持っている能力の上に構築しようとするものです。付加価値として何が必要なのでしょうか。まず大学における経験にはコストがかかっています。お金も必要です。特にアメリカにおいては、大学教育はお金がかかります。時間もかかります。日本においてもそうだと思いますが、大学の経験は4年間です。アメリカの場合にはよくあることですが、それ以上大学に留まって勉強する学生もいます。4年で卒業することが多いですが、5年、6年の場合もあります。それだけ在籍していても学位取得にまで至らない学生も出てきます。大学における自分たちの進む道、キャリアはお金や時間がかかっていることを認識するべきです。その意味では学生は消費者であると言えるわけです。大学教育にコストをかけた結果、かれらが何を見返りに得られるのか。それが付加価値です。親たちは授業料を払っている人たちですが、学生自身もそういう経験から何を得ているのかということを知りたいでしょう。そして学生を雇用する人たち、企業も大学での経験について問い掛けることになります。大学の卒業生が企業に一体何を持ち込んでくるのか。大学に行かない人と大学を卒業した人とではどのような差があるか。ある大学と別の大学と比べてどうなのか。長い間、良い大学、ランクの高い大学を卒業した学生を雇ったがる企業が多かったのですが、それについてもいろいろな疑問が投げかけられるようになっていきます。ハーバード大学、エール大学、プリンストン大学だけではなくもっと他の教育機関もあるのだということ、そこにおいても付加価値を生み出しているということ、大学生に対してもそれがインプット要因に付加価値を与えているのだという認識が深まってきました。

一般の人たち、政府の関係の人たちも大学の予算には税金を使っています。税基金からの収入も入ってきます。特に今日、アメリカにおいてはそうした経験に何が提供されるかということに対しての関心が高まってきました。大きな運動の高まりといえましょう。そしてそれを測定することが必要になってくるわけです。大学の経験で何が起きているかを測定しようという気持ちが高まっています。

またアセスメント、評価には二つの重要なグループがあると思えます。大学そのものが第一のアセスメントのグループです。自分たちの理解をする、文章化して記録することになります。二つ目のグループが大学、親、一般の人たちです。その人たちもどのくらいのいい結果を、どの大学が出しているかという付加価値を測定したいという気持ちを持っています。Swing先生がお話されました最初の調査であります。初年次学生調査、CIRPと呼び、HERIで実施しています。コ・オペラティブ・インスティテューショナル・リサーチプログラム、これは戦略的に選択されたタイトルだと思います。この調査プログラムには多くの



大学が参加しています。

昨年は、私立・公立、4年制・2年制とり混ぜて、640の教育機関が協力的に研究プログラムに参加しました。Institutional というのは、これは大学、組織、機関の単位で行われている調査だということを示します。また、College Student Survey と呼ばれる、HERI という私の研究機関の調査もあります。この調査は多くの大学で行われています。山田先生のグループの調査はこの日本版に相当します。

研究プログラムですが、高等教育の教育機関、研究機関を対象として、どういう関心を持っているかに焦点を当てています。参加機関にも情報を与えることによって全国的なデータとして何が読めるかということを考えてもらうことになります。

さてプロセスとしては、長期調査、毎年新しい初年次の学生に対して調査をする形をとっています。データが上がってくると、最終的にはどういう生活を送れるかということの情報が読めるように分析します。各大学同士あるいはグループ間の比較データにもなります。そのような形で調査が行われています。参加している大学にどういう学生がいるのかということ、それがまた全国的なデータと比較されて比較グループとの間の相関もとれる。自分自身を他の大学と比較することもはできる環境になっています。

さてこのリサーチの背後にあるのは、正確なインプットをはかりたいということです。単に大学にいることだけではなく、卒業時だけではなく、最初に入学時点ではかろうということであります。アレクサンダー・アスティンが設立者としてCIRPを開発しました。そしてIEOモデル、input, environment output を理論化しました。それをさらにご紹介すると、3つのボックスが書かれています。これがインプットとして入ってくる情報です。初年次学生の調査をする際に学生はオリエンテーションを受けます。それが先ず大学生活の最初になります。インプットを見ることですが、高校でどれくらいの成績だったか。財政状況はどうか。どのような期待を持って大学に入ってくるか。学位をどの程度求めているか。大学によって、どのくらいの学位を得て将来どのような道筋を考えているか。法学博士、修士号をとるのか、ドクターをとるのかということです。それは高校との関連で語られます。コンセプトとしては平均以上、自分たちの同学年の人より優れているか。学力ということですが、数学の学生ならば数学にどれくらいの自信を持っているか。自信に基づいて自分の道筋を考えるでしょう。それは社会的にも自分に自信を持つということで、いろんな局面に対して評価があるわけです。それをインプットとして情報を落として初年次にデータ収集します。

Eは環境です。二つの方法があると思います。それによって情報を集めるということですが、これはここではYFCYという調査に相当しますが、一年次の最後のところで実施します。CSSはもう一つのツール、手段であってまた改善もされているということで大学生調査においてはさらに改善された形で実施され、とくに高学年次生、3、学生に対して4年生を対象に実施しています。これは大学を卒業していく学生を焦点にあてているものです。環境データをここで集積するわけです。

アメリカには residence college と呼ばれる寮制度を持っている大学も多いのですが、大学のキャンパスに住んでいる学生が同輩の学生との間の交流をどうとるかや、スポーツの場、

クラブ，さまざまな組織での経験を聞きます。また，教授陣とのかかわりが学生の成長といかなる関係を持っているかに焦点を当てて研究をします。例えば，授業だけではなく課外でも教授と話をしているかどうか。食事と一緒にするかどうかなどです。

カリキュラムはアカデミックな経験の一つですが，海外に留学することがあるでしょう。留学についても独立したリサーチが可能です。

課外の研究，課外の経験などについても研究がされています。リーダーとなってさまざまな組織にかかわること，劇のサークルのリーダー，グリークラブのリーダー，学生新聞の編集長とかが例ですが，環境ということに関するさまざまなファクターだと思います。それも適切に多角判定して，そのアウトプットを測ります。

3つ目のアウトカム。最後に出てくるものですが，ここには，Y F C YとC S S，環境とアウトカムが入っています。日本における調査では1年生の最後のところあるいは3年生のアウトカムだと思いますが，C S Sでは，「大学で何を得ましたか」と問い掛けます。たとえば「自分の表現を口頭でうまくできるようになりましたか」。「自分自身を表現する時に文章でよく表現できるようになりましたか」。「数学的な能力・技能において改良したと思いますか」。「大学に満足していますか」。「概念，価値観というものがどう変わりましたか」。このようなことを質問していますが，自分に対する考え方，自分をきちんと試すことという自己評価は日本以上にアメリカで重要な問題になっているかもしれません。学生が全員1年生を終えれば2年次に進級するとは限りません。場合によっては大学を去ることもあります。1年生から2年生にかけての学生のリテンション（中退せず，継続的に在学すること）の比率については，日本と比べるとかなり低いといえるでしょう。最終年まで行きつく比率も低いということです。そのような状況で，何人の学生が大学院に入ったか，重要なこととなりますし，大学院を卒業したあとや，あるいは学士課程を卒業したあとに，きちんと職につけたかも重要であります。

HERIという私の所属する高等教育研究所では高等教育に関する調査を行っています。ここでHERIのミッションについて説明したいと思います。HERIにおいては，ポリシーをつくることはそもそも改善に結びつくものであるべきであり，そのためには高等教育を十分に理解しなければいけないと考えています。そのうえでは大学生を把握することが重要だと思います。そうしたミッションは達成していると思いますが，そのためには協力が重要であります。高等教育機関とのさまざまな協力が必須です。またリサーチするには，ツール，資源を提供しなければいけません。制度としてそういうものがあること，トレーニングをすること，奨学金もきちんと入ってくること，組織化の力があること，それによって，インスティテュート・エクセレンスができるかということ等です。

さて具体的に初年次の学生調査に話を移します。C I R Pと呼ばれていますが，66年に始まりました。私は当時4歳でした。41年も前にこのような研究調査が始まっています。当初251の高等教育機関が参加して206,865件の回答がありました。最初の6年のことです。41年たった2006年には，271,441件の回答がありました。このときは393の教育機関，大学が参加しました。40年たった現在，参加数の総計を見ると，延べ800万の学生の回答があ

ったこととなります。1,200 の大学がこの調査に参加しました。大規模調査と言えるでしょう。しかし、他にも学生調査はあるわけでCIRPは唯一のものではないということにも注意が必要です。このような全米学生調査(CIRP)には、リサーチプログラムとして多くの大学が参加してきました。そして良いツールをつくりだしました。CIRPの利点は、長期の調査だということです。結果を個々の1年次の学生について追及をすることで分析します。1年生の時のデータと4年生のデータを比較できる。大規模なものとして唯一これがあるということでもあります。さらにまたリサーチのやり方が重要だと思いますが、長期調査であることで、始めた時には大学に入る時には大学生がどうであり、インプットとして大学が何を与えられるかよくわかっていなかったところもあります。

アメリカにおいてはいろいろな討論がなされました。アウトカムについて、大学で得られるのも、どういうアウトカムがなければいけないかという議論が盛んになりました。同じものをすべての大学でと考えるのか、それぞれミッションが違っていいのかということも議論の題材です。アウトカムはこうであるべきだという合意が、もしあったとしたら、それをいかにしたら最善の測定ができるか。間接的な方法があるかということです。この調査では、それらのアウトカムを自己評価によって測る方法をとっています。しかし、こうした間接調査だけでなく直接調査も必要なのかと考えます。そうすると、各能力で直接的なインプットをどれくらい大学が持っているかを把握できます。

アメリカにおいては、近年、これは重要な問題になっています。アウトカムの調査については、情緒的な側面、人間の感情に関するもの、価値観、信念、モチベーション、満足度が入ってきます。認知的なもの、ナレッジ、クリティカルな考え方、批判能力、ベーシック・スキルと並んでいます。アウトカムを決めるわけですが、このような調査において、いかに測ったらいいか。評価すべきかをずっと考えてきました。

一般的にわかったことについて、いくつか具体的に申し上げます。インプットの特徴が重要であることをまず申し上げます。アウトカムは出てくる側にあるわけですが、このリサーチによってわかったことは、大学のタイプが意味を持っているということです。大きな大学ですと教授陣も多く大学生も多い。アウトカムも違います。大規模大学と小さな教育専門の大学を比べますと、教員と学生の関心の持ち方が違う。アウトカムも違います。大学生のタイプも違います。消費者という言葉を使いました。ピア・グループという同輩の学生、自分たちがかかわる同年令の学生もアウトカムにかかわります。どのような形の関与をするか。大学生活に対する学生の対応の仕方です。特に自分たちが具体的にかかわるものとして、特に我々の機関ではデータベースとして巨大なものがあるので、そこから引き出してみました。関与の度合いが深ければ深いほど得るものは大きい。シンプルに聞こえるとは思いますが、多くの研究が実際にはこれに目を向けて行われています。次に、アメリカにおいて教育の効果に影響を及ぼす要因として、学生が住んでいる場所が重要だということです。カレッジライフにおいて、いい結果が出てくる、すなわちアウトカムが優れているのは、家に住んでいることではないということでした。在宅の学生より家を離れている学生の方に優れた成果が発揮される傾向が見られます。リーダーシップの能力の点でもこの成果は当てはまりま

す。人間関係の構築の仕方，スキルも同様です。文化的な意識でも家を離れている学生の方が高い，よりポジティブだということが判明しています。

住む環境も学生の最終学年までの進級の可否に関わっています。大学は学生に最終的に学位を取得して欲しいと願っていますが，学位を得た後，どういう道に進むかということにもかかわるといえるでしょう。キャンパスに住んでいる学生の満足度が高いのですが，それは教授陣とのコミュニケーションが良くとれていることへの満足度だということです。

学業に対する関与とアウトカム関係を見てみましょう。ホームワークとのかかわりです。学位を取得できるか，1年生から始めてBAを取得できるかどうか，最優秀賞など高い成績で卒業できるかどうかということです。その場合によく勉強する学生の方が，大学院に進む確率が高く，自分の情緒面の管理，認知度においても優れていました。

認知能力ということでは自分の分野にかかわって，特に大学院に対する準備ができるということが重要です。また大学院に進まないとしても，応用ができるということも重要です。学部のプログラムで注目いただきたいのは，リテンションに，大学院に進むのか，大学に満足しているかという要望が関係していることです。留学の経験も関係しています。1年間留学すると，言語能力が高まり，文化に対する認識も深まることがわかっています。教授との結びつきが課外でも深いこと，課題や成績について話ができる，いろんな問題について話ができるということもポジティブな要素でした。すべてのエリアにおいて個人的な知的成長やアウトカムに教員の関与がかかわっていることがわかりました。「正」の相関があるということです。学業のアウトカムですと成績が高いということです。教授とのかかわりが重要だということです。最終年度まで進級すること，さらにまた大学院に進む可能性も高まることもわかりました。インパクトとしては最大のものと言えましょう。学部生の経験の中でも自分たちが教授とどのようなかかわりを持てたかということです。





同輩の学生とのかかわりも重要です。リーダーシップ能力の構築にも役立ちます。自分たちがクラブに入っているかどうか，リーダーシップを発揮する，クラブのリーダーになること，公の場で発表する能力を持つことも重要だと思います。学生と深い結びつきがあることは文化的な意識の高まりでもあります。大学への満足にもつながります。住環境に対する満足もかかわってきます。最終的に学位に行くまでたどりつけるかは，アルコール摂取ともかかわることがわかりました。必ずしもプラスのアウトカムとは言わないし，ネガティブとも言わないのですが，特に私の専門としている大学のアルコール飲酒を調査の項目のひとつとしてあえて入れています。飲酒も一つのファクターだったということです。




このように，入学してくる学生を捉えることが重要でした。一連の研究を通じて，大学のインパクトに相関関係を持つ，同輩の仲間の影響が強いこともわかりました。経験の中で，特に特筆すべきは教授との関係でありました。どういう住環境か，キャンパスの学生寮に住むことがポジティブな結果につながることをわかりました。


それでは，情報があると何ができるか。大学教育機関として考えなくてははいけません。学生の中で学業の専念できるよう，同時に社会的な結びつきも深められるような環境を作り，そして提供しないとはいけません。環境の提供によって，大学生生活全体に対してのアウトカム

がよくなるということです。

自分たちに何ができるかを知るための学生調査であると思います。情報が多ければ多いほど、教育機関、研究機関として何をすべきなのかが明確になります。HERIの研究成果についてのサイトもありますので、ぜひご参照ください。ご清聴感謝申し上げます。


 <p><b>College Student Surveys and Institutional Improvement in the United States</b></p> <p><b>John H. Pryor</b> Director, Cooperative Institutional Research Program, Higher Education Research Institute, University of California at Los Angeles</p>	 <p><b>College Student Surveys</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Information collected about the experiences of college students helps us to understand those experiences.</li> <li>If we understand the experiences, we can learn from them.</li> <li>We can use what we learn to <u>improve college</u> for our students.</li> </ul>	 <p><b>College Student Surveys</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>We know that the characteristics of the entering student have a great impact on that student's college experience</li> <li>Example: CIRP studies indicate that two-thirds of the variance associated with obtaining a college degree comes from characteristics of the entering student, not what the institution offers.</li> </ul> 
---	--	---

 <p><b>College Student Surveys</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>To compensate for the impact of the pre-college characteristics, studies of the college experience can document "value added."</li> <li>"Value added" refers to what the college adds to the already-existing abilities of the student.</li> <li>Who wants to know about "value added"?             <ul style="list-style-type: none"> <li>Parents of students</li> <li>Students</li> <li>Employers of students</li> <li>Public and public officials whose tax money helps to fund part of the college budget.</li> </ul> </li> </ul>	 <p><b>College Student Surveys</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Thus we have two fundamental audiences interested in college assessment:             <ul style="list-style-type: none"> <li>The Colleges themselves                 <ul style="list-style-type: none"> <li>to understand, improve, and document the experience</li> </ul> </li> <li>Parents, students, and the public                 <ul style="list-style-type: none"> <li>to assess the "value added" and determine how well a particular college educates students</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>	 <p><b>College Student Surveys</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>The first survey to be used at many American colleges was the CIRP Freshman Survey.</li> <li>Cooperative</li> <li>Institutional</li> <li>Research</li> <li>Program</li> </ul>
--	--	--



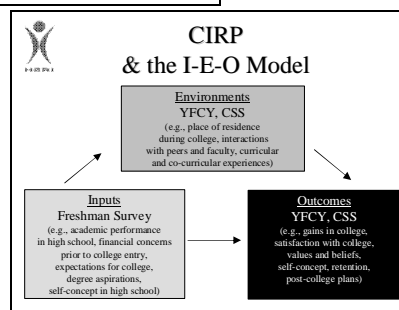
**CIRP Survey**




- The CIRP Freshman Survey was designed as a longitudinal survey that could be given every year to examine the new incoming class of first-year students.
- Provides important data on what these students were like when they entered college.
- Also provides comparative data for institutions




**Theoretical Model**


- To accurately assess the impact of college we must not only measure students during college and at the end of college, but at the beginning of college.
- Alexander Astin, founder of the CIRP, has called this the I-E-O model, for Input, Environment, and Output.




 <p><b>Higher Education Research Institute</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>HERI conducts the CIRP surveys</li> </ul> <p>"The mission of the Higher Education Research Institute is to inform educational policy and promote institutional improvement through an increased understanding of higher education and its impact on college students."</p>	 <p><b>HERI mission continued</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>We accomplish this mission by:             <ul style="list-style-type: none"> <li>Working in cooperation with institutions of higher education</li> <li>Producing and disseminating original research</li> <li>Providing the tools and resources to utilize research at the institutional level</li> <li>Training researchers to advance institutional assessment and scholarship in higher education</li> <li>Developing partnerships with higher education organizations to promote institutional excellence</li> </ul> </li> </ul>	 <p><b>CIRP Freshman Survey</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>CIRP Freshman Survey started in 1966:             <ul style="list-style-type: none"> <li>206,865 respondents</li> <li>251 Colleges and Universities</li> </ul> </li> <li>In 2006, 41 years later:             <ul style="list-style-type: none"> <li>271,441 respondents</li> <li>393 schools</li> </ul> </li> <li>Total over 40 years:             <ul style="list-style-type: none"> <li>8,319,318 students</li> <li>1,201 colleges and universities</li> </ul> </li> </ul>
---	---	---

 **Other Student Surveys in US**

- National Study of Student Engagement
- College Student Experiences Questionnaire
- There are others, but CIRP advantage is the longitudinal program with the
  - Freshman Survey – YFCY -CSS
- Without a longitudinal program, one cannot be sure of what the student brings with them to college and what the college impact is.


 **Outcomes**

- Current debate in the U.S. is on outcomes:
  - What should outcomes be?
  - Should they be the same for all institutions, despite different institutional missions?
  - If we agree on what the outcomes should be, how best to measure them?
  - Are indirect measures adequate?
  - Are direct measures the only useful measures?


 **How CIRP Examines Outcomes**

	Outcome	
	Affective	Cognitive
<b>Psychological</b>	Self-concept	Knowledge
	Values	Critical Thinking Ability
	Beliefs	Basic Skills
	Drive for Achievement	Academic Achievement
	Satisfaction with College	
<b>Behavioral</b>	Personal Habits	Career Development
	Avocations	Level of Educational Attainment
	Mental Health	Vocational Achievements
	Citizenship	Level of responsibility
	Interpersonal Relations	Income
		Awards or special recognition


Source: Ash (1993) What matters in college: Four critical years revisited.

 **General CIRP Findings**


- Input characteristics matter and predict much of what outcomes of college will be
- Type of institution also matters (large, research focus versus small, teaching focus)
- Peer group matters (other students)
- How involved a student is with college matters

 **Involvement (Engagement)**


- The more involved a student is with college the greater the gains in college
- Where students live during college
  - More positive results in students leaving home
    - Leadership
    - Interpersonal skills
    - Cultural awareness
  - Living in a college residence hall also adds:
    - Retention
    - Satisfaction with faculty

 **Involvement (Engagement)**


- Academic involvement
  - More time studying/homework related to
    - Retention
    - Graduating with honors
    - Enrollment in graduate school
    - Self-reported gains in cognitive and affective skills
  - Time in class or laboratory
    - Self-reported gains in cognitive ability
    - Preparation for graduate school

 **Involvement (Engagement)**


- Special programs
  - Honors programs
    - Retention
    - Attending graduate school
    - Satisfaction with college
  - Study Abroad
    - Foreign language skills
    - Cultural awareness

 **Involvement (Engagement)**


- Involvement with Faculty
  - Almost every area of intellectual and personal growth measured
  - Positive associate with every academic attainment outcome:
    - Grades
    - Retention
    - Graduation with honors
    - Enrollment in graduate school

 **Involvement (Engagement)**

- Involvement with Peers
  - Leadership
  - Public speaking
  - Cultural awareness
  - Student life issues
    - Satisfaction with college
  - Retention
  - Alcohol consumption

 **What Colleges Can Do**

- Understand the impact of your entering students characteristics
  - Input characteristics have great influence
  - Peer influence
- Residential experience is key
- Foster involvement among students
  - Academic
  - Co-curricular activities
  - Social

 **What Colleges Can Do**

- Student surveys have the power to aid institutions in understanding what they can do to improve the college experience for their students, and to document what that experience is

 **For More Information**

<http://www.gseis.ucla.edu/heri/heri.html>

<http://www.gseis.ucla.edu/heri/freshman.html>

<http://www.gseis.ucla.edu/heri/yficy.html>

<http://www.gseis.ucla.edu/heri/css.html>

John Pryor, Director, CIRP: john.pryor@ucla.edu

## 学習と教育の改善に向けて 学生調査の活用

山田 礼子  
(同志社大学)

司会 それでは3番目の報告, 山田礼子先生にお願いします。山田先生は本学の社会学部教授であり, 教育開発センター副所長を務めておられます。本学同志社大学文学部社会学科を卒業後, カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)の教育学大学院で博士号を取得されています。プール学院大学助教授を経て現職にということです。山田先生は大学教育に関しては日本の第一人者です。『1年次導入教育の日米比較』など, 初年次教育, 導入教育の訳語を確立されている大きな貢献のある先生です。『社会人大学で何を学ぶか』『プロフェッショナルスクール~アメリカの専門職養成』など著作もお持ちで, 数年間話題になっている専門職大学院に関しても立派な研究をされています。大学教育関係の学会でさまざまな要職を務めておられます。学外では文部科学省中央教育審議会専門委員, 文部科学省, 大学設置学校法人審議会専門委員, GPの特色ある大学支援プロジェクトの実施委員等さまざまな仕事をされています。4月から教育開発センター所長となり, 学内外でのリーダーシップを発揮して下さるものと期待しております。

本日は「Improving Learning and Teaching Through the Results of Student Survey」, 学習と教育の改善に向けて: 学生調査の活用というタイトルでお話をいただきます。ではお願いいたします。

山田氏 ご紹介いただきました山田でございます。プレゼンテーションは英語でさせていただきますが, 第二言語ですので少し時間がかかってしまうかもしれませんが, ご容赦いただければ幸いです。お二人の先生からフレームワークと理論部分を丁寧に説明していただきました。私の方はCSSの日本版を私どもの研究グループの中で開発してまいりました。その結果を今日, お話させていただければと思います。

今回のシンポジウムのタイトルは「教育評価としての学生調査」です。このようなシンポジウムを同志社大学で開催することができ, 非常にうれしく思います。すべての参加者にお礼を申し上げます。最近, アカウンタビリティの運動が日本でも大きな運動になっております。日本の大学でもこうしたアカウンタビリティの問題にスポットライトがあたっております。多くの大学が学生調査を実施するようになってきていますが, しかし多くの調査は理論的な枠組みに欠けています。以前の日本における調査は情緒的な側面のアセスメントに関しては発展してきませんでした。学習のアウトカムは学力で測定する, 英語力のテスト, TOEFL, TOEICで測定しがちでした。今までの調査では学習の結果は学力を中心にみてきましたが, 学生の情緒的な側面に関しての成果を検討することは少なかったといえるでしょう。

そこで日本における学生調査の意義について、3つの点から分析する必要性を挙げております。学習、教育政策の変化、学生の変容という背景です。学生の情緒的な側面を見ていかななくてはならない。多くの大学にわたって長期的に使用することができる。これらは改善のツールとして大学のレベルで、学習、教育で使えるということです。Swing先生、Pryor先生が説明されたアメリカ主流の理論であるカレッジ・インパクト理論は、日本ではあまり大学では高い評価がありません。なぜならチャータ理論とスクリーニング理論が日本の大学では主流だからです。つまり、大学のインパクトよりも大学のブランド、評判、歴史の方が重要とみなされてきたからです。外部の効果の方が内部の大学内の効果より大きいわけですから。それでは調査の枠組みの説明をさせていただきます。

私たちはCSS,HERIが開発したアメリカ版の学生調査をもとに日本版の大学生調査、JCSSを開発しました。調査の項目は、学習行動、価値観、モチベーション、自己評価等から成り立っています。この調査の意義は大学の環境的な側面にフォーカスしたところにあります。今まで日本の文化においては大学のインパクトはあまり考慮されていませんでした。そこで調査の質問として環境の要因の効果はどれだけあるか。学生のインプットの要素を、どこまで考慮すべきか。大学の環境の違いはどこから出てくるかということを考えました。

CSSの根本的なモデルはIEOモデルです。Pryor先生にご説明いただいたモデルがそうです。2004年にパイロットスタディとしてJCSSは実施され、1,300人以上の学生を調査の対象としました。2004年には環境、結果の関係をもとに枠組みを再考いたしました。関与、エンゲージメント理論、これはEの重要な要素ですが、これにより焦点を絞りました。学生の学習の発達には学生がいかに関与しているか、どれだけか、質があるのかに関与しています。教育の政策、実践、教職員の関与、学生の学習に関する関与にも貢献していますし、教育の結果にも大きな関係があります。アレクサンダー・アスティン、HERIをつくられた方ですが、彼が打ち立てたIEOモデルをもとにパスカレラ博士が考案したモデルをもとにいたしました。環境的な要素の重要性、社会とのインターアクション、大学の環境、学生の能力の質を見ていきまして、JCSS2005年においてはあまりインプットの要因には焦点を当てませんでした。むしろ、環境的な要素に焦点を当てたのが新しい側面です。「JCSS2005年」の特徴ですが、参加大学の特性をコントロールすることによって、参加大学同士が比較しやすいようになっています。専攻を分けること、つまり理系と文系を分けることによって比較分析を行うこと、大学間での比較が可能となりました。

2番目、成績をコントロールすることによって1~4年で比較分析を大学内でもできるようになりました。これが我々の調査の二つの特性です。これがJCSS2005に参加した大学です。8つの国立、公立、私立の大学がこの調査に参加してくださいました。残念ながらHERIのCIRPとは違いますが、それほどたくさんの大学にはご参加いただけませんでした。しかし将来はより多くの大学、より多くのカレッジが参加いただければと思います。参加学生数は4,000人近くでした。この調査は授業中にしました。Aが非常に選抜性の高い大学です。Hが中くらいの選抜性を持つ大学です。この尺度は河合塾の偏差値をもとにしています。環境、学習の結果を大学間で比較分析してみました。「どのようなインパクトを大学の環境は



学生の情緒的，認知的な側面にもたらずのか。違いが成績に，大学の規模，専攻によってあるか。環境によって情緒的な結果において違いが出るのか」といった問題設定をして，変数間の関係等を分析いたしました。

調査の結果を示します。これが認知的な部分の結果を示しています。習得された知識の能力ですが，これらは伝統的な知識，能力と大学教育では考えられているものです。その結果として理系の学生たちの方が専門知識に関しては知識をたくさん得ている一方で，文系学生は専門分野の知識はあまり習得していない。理系の学生はこの面では文系よりスキルが上がっています。一方で，読み書き，グローバルな問題の理解においては，理系より文系の方が優れた結果が出てきます。C大学における文系の学生，C大学は厳しく入学生をふるう国立大学ですが，この学生はたくさんの項目にわたって多くのことを修得しました。この違いがどこから出てくるか後で考えたいと思います。

二つ目のグラフは新しい種類の知識と技能の獲得を示しています。コミュニケーション能力，実践的な能力，異文化間の能力などです。これは最近の日本社会においてキャリアを築いていくのに重要なスキルですが，この結果からわかったことは多くの学生が高いパフォーマンスを見せたのがコンピュータ技術です。外国語能力は低いパフォーマンスでした。これは理系も文系も同じ現象が見られました。私立の大学に比べて，国立大学の学生は外国語能力が比較的低い結果を示しました。文系の学生ではパブリック・スピーキング，異文化間理解のスキルが理系の学生に比べて優れている結果を示しています。E，G，H大学の学生は高い人間間のスキル獲得値を示しました。F，G大学の学生には，宗教的なパフォーマンスが高いものがありました。これらの大学は宗教系の建学理念を持つ大学として，宗教関係の教育がカリキュラムの一環として提供されていました。課外授業でも提供されているケースもあります。

次に大学間の「比較分析結果を説明いたします。修得された知識，スキルに関してファクター分析をもとにした結果を示します。大学が従来から重要視してきた伝統的な知識として分類される「古典的な知識」は大学の選抜性，いかに選抜度が高いかということと高い相関関係がありました。国立大学の学生の方が私立大学の学生よりもこのようなスキルの獲得に関する自己評価が高いことも判明しました。理系の学生の方が文系の学生よりスキルが高いという自己評価結果も示されました。一方，「現代的な知識」として分類されている知識に関しては文系の学生の方が理系の学生よりも優れているという自己評価結果が示されました。具体的には，異文化間理解等のスキルに関しては文系の方が優れているという自己評価結果です。その結果として，理系の学生は近代，グローバル社会で求められている知識との接触度が低い傾向がある。しかし理系の学生は典型的な古典的な知識は大学教育を通じて獲得する傾向が高いということが言えるのではないのでしょうか。すなわち，伝統的な大学教育で重要だと考えられている要素が理系分野では重要視されているということにもつながっているのかもしれません。

いかにして学生生活に適應するかということに関して，細かいことをいろいろと聞きました。大学生生活に慣れたかどうか。より小規模の小さい大学の学生の方が友人との交流面では

成功しているという結果です。もう一つは多くの学生が成功しているのは、学習環境への適応に関してということでした。時間をうまく管理している。大学が要求することにたいしてうまく自分を調整しているといったことです。例えば、C大学の学生、文系の学生は特にこれらの項目で高いパフォーマンスを見せていました。E大学の学生も同じ傾向でした。その背景として、他のどの大学よりも、C大学の学生は教職員との交流が高いという結果を示したことも関係しているかもしれません。

次に、認知項目の自己評価の大学間比較分析を示してみましよう。学生が大学生活に適應するかどうかは、自己評価が重要となってきます。理系の学生は数学の能力に関して文系の学生より自分は優れていると自己評価をしています。対照的に文系の学生の方が読み書きに関しては理系に比べてできていると自己評価していました。コンピュータ能力に関しては、H大学の学生が優れているという結果を示しています。特に学力に関しては国立学生が高い傾向にあり、選抜性との高い相関関係を示しています。しかしクリエイティビティ、宗教、精神性に関してはD大学、G大学の学生に高い自己評価結果が見られました。

次に、情緒的な項目に関しての自己評価結果を示してみましよう。国立大学と私立大学の違いとはどこに見られるでしょうか。先ず協調性、他の人を理解するという項目に関して差異が見られました。これらの項目に関しては国立大学の学生よりも私立大学の学生の自己評価が高くなっていました。「将来成功したい」という項目にも同様の傾向が見られました。リーダーシップの能力についての自己評価が低かったのがH大学でした。A大学については選抜性の高い著名大学ですが、興味深い結果が出ました。A大学の学生において、高い自己評価が見られたのは認知分野でしたが、一方で情緒的な分野においては、比較的低い自主評価結果が見られました。これは面白い分析結果のひとつではないかと思えます。そこで時間があればアメリカの調査の結果と比べてみたいと思えます。

環境面に焦点をあてて、より詳細に大学間の比較で教職員がどれだけ関与しているかを見てみましょう。教職員は理系の学生をより早い段階から将来の方向付けに関与させています。C、H大学の教職員は将来の方向付けや教育に関するアドバイス、ガイダンスを積極的に行い、同時に学生が知識やスキルを得ることにに関して教職員が積極的に関与しています。

そこで考えなくてはならないのは学生が知識、スキルを得ることに関しての決定要因となるのは何かということです。重回帰分析結果を示してみましよう。学生が知識、スキル、社会で必要とされているものを得るのに環境要素が重要であるという結果が示されています。教育の質において満足しているかどうかも重要な決定要素です。そのためには学生同士の交流も重要であることがわかりました。成績のよい学生は多くの知識、スキルを獲得できていることもわかりました。これらはインプット要因の一つでもあります。

4つ目の規定要因は、いかに大学に適應できているかということと教職員がいかに関与しているかということですが、どちらも重要な規定要因です。学生側からの関与、教職員からの関与の度合いと言い換えられるでしょう。本日は学生のタイプ分類には時間の関係から説明いたしませんでしたが、研究グループの青山学院大学の杉谷先生が学生に関する尺度をつくってくださいました。この学生のタイプ尺度を使用してみると、学生のタイプもまた重要

である，すなわち前向きな学生の方がネガティブな学生よりも大学生生活に円滑に適応できることが判明しました。

そして外に向けての情緒性，人間関係を築いていく上で重要な要素ですが，それには現代的，実践的な知識の獲得が重要であり，前向きな学生は他の学生との交流もスムーズに築いていくことができます。内面的な認知性は学術的な生活を進める上で，重要ですが，これは高校の成績，GPAなどのインプット要因とも高い相関関係にあります。古典的かつ現代的な知識の獲得も重要であり，学生側，教職員側，両方の関与が不可欠です。学生がどのタイプの学生なのか，これによって学生自身の自己評価も決定される傾向が見られます。自分のことを前向きに考えているか，自分のことをマイナスに考えているかということが，あらゆる側面に影響を及ぼしているのでしょう。そこで支援システムを作るだけでなく，学生が自分に自信を持つことを支えることも重要であると考えます。

結論として，パスカレルがつくりだしたモデルをもとに，私たちは大学の環境は重要であることを確認することができました。学習のアウトカムである成績，GPA等には，学生，教職員の関与の度合いが重要であるということ，学生サイド，教師サイドの関与も重要であるということがわかったわけです。これらの変数の間の関係には高い相関関係が互いにあることもわかりました。もうひとつ，大学独自の環境も重要であることが判明いたしました。これのいい例が，中程度の選抜性を持つH大学です。H大学の学生は項目によっては認知，情緒面ではよい自己評価結果を見せていました。その要因として，教職員の関与の度合い，学生の関与の度合いがこの大学においては良かったことがこれらの良い自己評価に結びついていたと考えられます。大学において入学時のふるいの中くらいであっても大学において環境がよければ，学生と教職員の双方の関与の度合いが積極的であれば学生は多くの項目において良い結果につながるといえましょう。

最後に，私たちの調査の結論，将来の可能性に関して触れておきたいと思います。このデータの結果を有効活用し，それぞれの大学において教育を改革していくには，また，学習，教育の成果について，教職員，それぞれの大学の学生に関して改善していくうえで，残念ながら今のところ日本においては，まだこのような調査の結果を有効活用し，教育改革にはつながっていないとはいえません。教育学習の成果にも活用できていません。実際には数多い学生調査がなされてきますが，これは研究者の興味をもとに実施してきたわけです。しかし日本において教育のすべてのレベルにおいてさらに改善がなされるためには，このような学生調査をさまざまな教育機関において，教育改革のために，教育改革の運動において使わないといけない。学生調査を長期的に続けるために，データをさまざまな参加大学から収集していきたいと考えております。

Pryor 先生のご説明のようにCIRPを開始された40年間の間にかなりのデータが収集されました。そしてこれらを教育改善という目的に使っておられる。全国レベルの大学においても地域型の大学においても，すなわちいずれの大学においても，学生の学習，教育の改善につなげている。日本でもこのような可能性を考えなくてはなりません。そして次のレベルにおいて重要な事は，プロフェッショナルなデータ分析セッションをつくりださなければ

ならないことであると考えます。このような調査を私たちはリサーチレベルで実施いたしましたが、それに加えてIR（機関研究）セクション、これはそれぞれの大学の分析をするようなセクションですが、このような部門を設置すべきかと思えます。残念ながらIRセクションは日本の大学ではなかなか広がりを見せません。しかしこのようなセクションは将来、ぜひ設置されるべきだと考えます。それが私たちの基本的なリサーチの結果から推奨できることです。時間の関係で大学内の分析にはフォーカスできませんでした。本日お話をさせていただいた結果すべては大学間の比較分析に基づくものです。ご清聴どうもありがとうございました。

### Improving Learning and Teaching: Through the Results of Students Survey

国際シンポジウム  
「教育評価としての学生調査  
- 学生の成長を促進する方法の開発 -」  
Reiko Yamada Ph.D.  
Doshisha University  
ryamada@mail.doshisha.ac.jp

### Table of Content

- 1 Introduction of the JCSS2005 Research
- 2 Comparative Analysis of Environment and Learning Outcome between Universities
- 3 Conclusion

### 1-1 Background of the Study

Background

- Underdevelopment of assessment of learning in Japan
- Most of assessment is in the category of academic achievement
- Previous studies=outcome, academic achievement
- A lack of assessment studies based on affective aspect

Significance of Student Survey in Japan

- The importance of assessment of learning in the shift of teaching and learning oriented policy
- Development of student survey emphasized affective aspect which can be used between several institutions in the long run
- Use as the tools for improvement in learning and teaching

### 1-2 Dominant Theory Explaining Japanese University

- College Impact theory is not highly appreciated
- Charter theory and Screening theory are recognized as the important theories in Japan  
College Brand, Deviation Value, History

External Effect > Internal Effect

### 1-3-1 Research Framework

- Model = CSS (College Student Survey)
- Survey = JCSS (Japanese College Student Survey)
- Items = learning behavior, value, motivation, self-assessment
- **Significance of this study = Focus on the environmental aspect of college (previously, college impact has not been well considered in Japanese culture)**
- Research Questions
  - (1) What is the effect of environmental factor?
  - (2) To what extent, should we consider the input factors of students?
  - (3) What makes the difference of college environment.

### 1-3-2 Research Framework

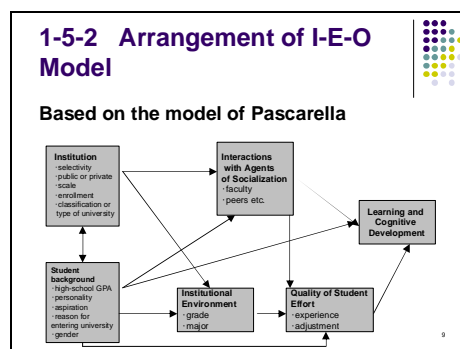
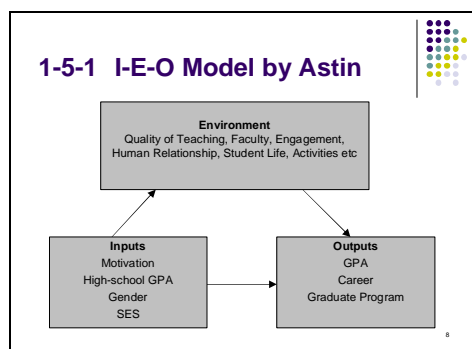
• Fundamental Model I - E - O Model

- Through 2004 JCSS, arrange the framework regarding the relationship between environment and outcome
- Focusing on involvement or engagement theory
  - Development of student learning has a close relationship with students' involvement in learning and its quality and quantity
  - Educational policy, practice and faculty's involvement in students contribute to students' involvement in learning and educational outcome

### 1-4 Type of Outcome by Type of Data

Type of Outcome		
Type of Data	Cognitive	Affective
<b>Psychological</b>	Subject-matter knowledge Academic ability Critical thinking ability Basic learning skills Special aptitudes Academic achievement	Values Interests Self-concept Attitudes Beliefs Satisfaction with college
<b>Behavioral</b>	Degree attainment Vocational Achievement Awards or special recognition	Leadership Citizenship Interpersonal relations Hobbies and avocations

Assessment for Excellence by Astin, A.W. 1993 p.45



## 2 Characteristics of JCSS2005

- Make comparative analysis **between universities** possible
  - Control characteristics of participating universities
  - Distinguish majors (Science major and Arts major)
- Make comparative analysis **within universities** possible
  - Control grade



10

## 2-1 Sample Colleges

- November 2005–January 2006
- 8 National, Public and Private U Population=3961
- In class

Name and selectivity	N	Founder	Place	Type
A highly selective	1091	National	Urban	Old university
B very selective	322	National	Urban	Old university
C selective	318	National	Local	Old university
D very selective	271	Private	Urban	Old university
E selective	666	Private	Urban	Old university
F selective	242	Private	Urban	Old university
G selective	678	Private	Urban	New university
H moderate	373	Private	Urban	New university

11

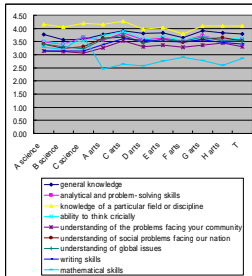
## 2-2 Comparative Analysis of Environment and Learning Outcome between Universities

- What kind of impacts does college environment give to affective and cognitive aspects of students?
  - Are there differences in grade, institution, size of college, and major?
  - Are there differences in affective outcome according to environment?



12

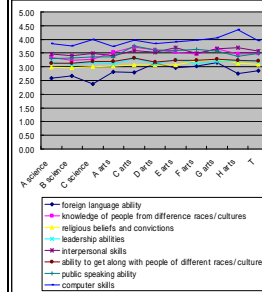
## 2-3-1 Acquired Knowledge/skills



- Traditional knowledge and skills sought in university education Knowledge in major, general knowledge, and current topics Students much acquired knowledge in major and general knowledge
- Students in Science major get much knowledge in major but less knowledge in general knowledge
- Students in Arts major get knowledge in major relatively low
- Science major > Arts major in Math skills, Arts major>Science major in writing skills and understanding of global issues
- Students in Arts major in C university acquired much in many items

13

## 2-3-2 Acquired Knowledge/skills



- New type of knowledge and skills in university education communication skills, practical skills, inter-cultural skills
- High performance in computer skills
- Low performance in foreign language skills both students in science and arts major
- Students in national universities tend to have less foreign language skills
- Students in arts major have much public speaking ability, inter-cultural skills than students in science major
- High performance of interpersonal skills E,G,H
- High performance of religious beliefs F,G

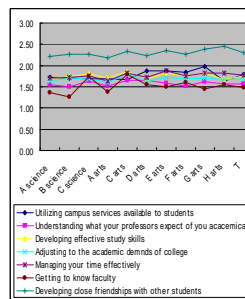
14

## 2-3-3 Comparative Analysis of Acquired Knowledge/Skills between universities

- Classical knowledge
  - high correlation with selectivity, National U>Private U, Students in Science>Students in Arts
- Modern knowledge
  - Students in A>Students in S
- Inter-cultural skills
  - Students in A>Students in S,
- Students in Science do not deal with the knowledge sought in modern and global society<sup>15</sup>



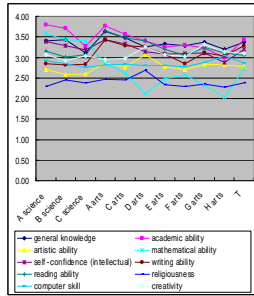
## 2-3-4 Adjustment to College life



- Successful in items like friendship with other students in small universities
- Successful in learning adjustments can be seen items like time usage, study skills, adjustment to the academic demands
  - High in C in Arts and E
  - Getting to know faculty High in C

16

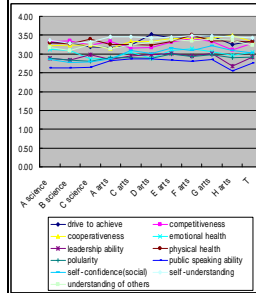
## 2-3-5 Comparative Analysis of Self-Evaluation in Cognitive items



- Math - Sciences > Arts
- Reading & Writing ability
- Arts > Sciences
- High correlation with selectivity
- Computer skill H
- Academic ability
- High in national U
- Creativity & Religiousness, Spirituality D & G

17

## 2-3-6 Comparative Analysis of Self-Evaluation in Affective items



- Cooperativeness, Understanding of others - Private U > National U
- High cooperativeness and Drive to achieve is high but Leadership ability is low in H
- Cognitive field is higher than affective field in A

18

## 2-3-7 Comparative Analysis of Environment- Involvement of Faculty between Universities

Advice and guidance about your educational program qui square 118.015 .000

	A(S)	B(S)	C(S)	A(A)	C(A)	D	E	F	G	H	T
Not at all	277 41.3%	101 43.9%	38 40.0%	226 80.1%	79 33.1%	93 45.4%	318 52.5%	121 54.3%	314 50.0%	123 34.5%	1690 47.0%
Occasionally	358 53.4%	121 52.6%	51 53.7%	139 37.0%	102 50.5%	96 46.8%	249 41.2%	89 39.9%	275 43.8%	190 52.5%	1670 46.5%
Frequently	35 5.2%	8 3.5%	6 6.3%	11 2.9%	21 10.4%	7 7.8%	21 6.1%	13 5.8%	39 6.2%	49 13.5%	255 6.9%
T	670 100.0%	230 100.0%	95 100.0%	376 100%	202 100%	205 100%	604 100%	223 100%	628 100%	362 100%	3595 100%

- Faculty tends to involve students in Sciences earlier for their future program
- Faculties in C & H positively involve students for future program, educational advice and guidance and assistance
- Involvement of faculty positively contribute to students' adjustment, acquisition of knowledge and skills

19

## 2-3-8 Determinant Factors of Outcome Students' Acquisition of Knowledge and Skills

- Environmental factors are important for students to acquire knowledge and skills required in society
- Factors for satisfaction with 'quality of teaching' and 'interaction with students' are important
- Students in the upper grade acquire much knowledge and skills
- Both factors of students' adjustment and faculty involvement are important
- Type of students is important factor (positive students can overall adjust to college life)

	B	Beta	t	p
TE(S)	-2114			.000
Mixing to the academic demands of college (E student adjustment)	.298	.181	11.654	.000
Quality of teaching and students' interaction (E satisfaction rate)	.146	.146	5.738	.000
College GPA (E or O)	.204	.154	6.242	.000
Grade (S)	.204	.138	5.916	.000
Adjusting to the academic demands of college (E student adjustment)	.187	.108	3.656	.000
Gender (1)	-.146	-.090	-3.635	.000
Utilizing campus services available to students (E student adjustment)	.151	.085	3.535	.000
Hope to reselect college (1)	.093	.071	2.914	.004
Advice and guidance about your educational program (E faculty's involvement)	.084	.062	2.197	.028

a. Dependent Variable: Classic knowledge Adjusted R Square: .246

20

## 2-3-9 Determinant Factor of Self-evaluation of Students

**Outside affectivity (important for establish human-relationship)**

- Modern practical knowledge and modern knowledge are important
- Positive students and students who can develop interaction with other students have higher self-rating on outside affectivity

**Internal cognition (important for academic life)**

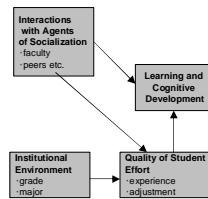
- High correlation with input factor
- Classic and modern knowledge are important
- Both students and faculty involvement are indispensable

**-Type of students is a determinant factor for self-evaluation of students**  
To establish self-esteem is important

21

## 3-1 Conclusion

- Confirm importance of college environment for learning outcome (grade, involvement of students and faculties)
- Both student & teacher engagement (involvement) is important
- Good example Selectivity 'moderate' university



22

## 3-2 Conclusion

- To make use of the results of data to educational reform in each university - improvement of learning & teaching
- Continue student survey in the long run & collect data for many participating universities
- Importance of professional data analysis section = Institutional Research section which is underdeveloped in Japanese Colleges

23

## コメンタリー

絹川 正吉

( 国際基督教大学名誉教授 )

司会 それでは次に絹川先生にお願いいたします。絹川先生は近年の日本の大学教育のオピニオンリーダーとして啓発してくださっている日本の教育界を代表する先生であります。本日、コメンテーターとして参加していただきましたこと、改めてお礼を申し上げたいと思います。絹川先生は東京都立大学理学部を出られて、東京都立大学大学院、理学修士を取得された後、1960年、ノースウェスタンユニバーシティのグラジュエイトスクールでPh.D.をとられました。『大学教育の本質』『ICUリベラルアーツのすべて』、『大学教育の思想』、『大学教育のエクセレンスとガバナンス』を次々に出されまして、私たちを啓発してくださっています。先生は国際基督教大学学長を1996年から8年間お務めで、今は名誉教授です。リベラルアーツを純粋な形で追究している評価の高いICUですっとリーダーシップをとられてきました。学外関係でも日本私立大学連盟常務理事、大学基準協会理事、大学評価学位授与機構専門委員等々、大学関係では要職をこなしておられます。平成15年(2003年)からGPとして特色ある大学教育支援プログラム実施委員会委員長をされています。日本の大学教育改革に大きな刺激を与え続けてくださっている先生です。本日は3人の先生方の報告に関して、大学教育の第一人者としてコメントをいただけるということで楽しみにしております。それではよろしくお願い申し上げます。

絹川氏 顔が赤くなるようなご紹介をいただいて話をどう始めるか戸惑ってしまいます。私は学生評価の問題に関しては専門家ではありませんで、完全にアマチュアであります。大学教育の実践家としての立場から今、ご発表がありました3人の先生方のお話を大変興味深く伺わせていただきました。同時にいろいろと疑問もあり、私としてはこういうことが知りたいということがたくさん出でまいりました。そういうことについていくつかコメントをさせていただきますと思います。

3人の先生方のご発表で、私の偏見を持った目を見たときに、こういうところが面白かったということをまずご紹介したいと思います。Swing先生は冒頭、「大学で学ぼうとしているすべての学生に最善の機会を提供することに献身している」と述べられました。このことは私には印象的です。for every studentsと言われるところにアクセントをおいて受け止めさせていただきました。こういうお考えの背景に先生のご経歴があることが印象的でした。2番目の大学の説明責任として組織改善を図らないといけないと同時に、その目的は学生の学習を成功させるために考えなければいけない。そのための視点として4つ上げられたわけです。一つはインプット。私はこれを初期条件、数学の言葉ですが、イニシャル・コンディションという言葉で呼んでいます。インプットが大事な一つのポイントになる。さらに、

大学を取り巻く外的条件，学生の大学における活動内容，大学の組織的あり方，というところに視点を置いて，課題に対してどうするかを考えたい，と言われました。この4つの視点の提示は極めて適切であると私は思います。

外的条件については，大学自身としては，いかんともしがたい問題ですが，それが大学教育に強い影響を与えていることを見逃してはならないわけであります。Swing先生の述べられている点で注目しますのは，一つは学生たちの多様性を維持することの重要性です。多様性が認知的機能の発達に関係している，という指摘は重要です。コグニティブなことがらに関係しているということを改めて考えさせられました。学生集団の多様性がクリティカル・シンキング・スキルの獲得にも影響している。このことは直観的にはわかる気がするわけですが，データの上で確認されていることに注目します。

入学難易度が大学の質と誤解されているという指摘がありました，アメリカも日本と同じだなと思いました。大学としてのパフォーマンスが悪いのは学生のせいだとする，そういう風潮もあるようでして，それを聞きますと日本と全く変わりがないという気がいたします。少しあたりまえすぎることで，よく勉強する学生が成功する。あたりまえのことですが，あたりまえのことが肝心ではないかと思うわけです。私もずいぶん悩みましたが，調査を大学の改善にどうやって結び付けるか。調査結果を大学の改善に結びつけることの困難も述べられていますが，これも日本と同様です。日本の方がひどいわけでありますが。

以上のレンズを考える前提としてもう一つ注目しますのは大学改革の企画に構成員が参加することの必要性を主張されていることです。どうも日本における最近の大学改革はトップダウンが強すぎるわけで，構成員の involvement の問題がなおざりになっていることを感じました。

3人の先生のお話の基本にありますのは，汎用的な調査様式です。そこに調査の具体性があるわけですが，CSS，または山田先生はJCSSですが，そういう調査様式の内容に強い関心を持っております。インディアナ大学等で開発した National Survey of Student Engagement (NSS E) については，ICUでも少し修正して使っております。ただICUの場合はアメリカにおけるリベラルアーツ・カレッジの基準認定のための自己評価の根拠として，この調査を使っているわけです。本日ここでのお話があったサーベイの目的とは意味合いが微妙に違うのではないかと思います。

その関連で，調査目的が明確でなければ調査は意味をなさないということです。ただ漫然と汎用性のある調査様式を使っても意味がないわけで，もっと極端に言いますと，何をするために調査するのかというのが，私はいつも気になるわけであります。目標というものを明確にした時に初めて汎用的な調査様式も意味を持ってくる。逆に言いますと汎用的調査様式の汎用的なサーベイの逆説性という難しいことがあるわけです。汎用化することによって全体の傾向はとらえられますが，逆に汎用化することによって調査の意味が失われるわけです。何のために調査しているのかということが問題になってくるわけであります。

Pryor先生のCollege Student Surveyについても似たようなことを思うわけですが，「アウトカムとは何か」ということを先生も問い掛けておられます。本質的な問いであると思



ます。先生のお話ですと、昨今のアメリカではアウトカムについて次のようなことが問題になっていると述べられました。アウトカムというのは何であるか、何であるべきか。問題は。大学のアウトカムとは何か。何でなければいけないのか、ということです。汎用的な問題にも関係しますが、大学のミッションが異なるにもかかわらず、アウトカムは同じと考えるのか。難しい点です。アウトカムをどう評価するか。直接的な評価が可能であるか。あるいはそれ以外に方法があるのか。そういう点は極めて重要だと思います。学生の大学生活への参加を問題にしておられて、大学生活に積極的に参加していくことの関連で、レジデンシャルの問題、どこに住んでいるかという問題を取り上げておられます。自宅を離れていることが学生たちの情緒的な側面に影響を与えている。リーダーシップの涵養とか、人間関係、文化的なセンスの涵養にそういう問題が関係していく。特にアメリカの場合、学生寮に居住することがリテンション、大学歩留り率にも関係している。教育に対する満足度にも関係している。そういう調査結果を伺ったわけでありませう。そういう見解が日本の場合にはどういうふうに適用されるのか。日本の場合には、たとえばICUのようにキャンパスの中に学生寮を持っている大学は少なくなっていました。学生寮を持つことが大学教育にとって重要なファクターになる。そういう問題を日本でどう受け止めるか。

学習活動、engagement の調査で、方法学ホームワークをしっかりとやり、勉強することが、大学卒業成績に関係する、という結論は、これはあたりまえですね。あたりまえのことをはっきりおっしゃっている。歩留り率にも関係している。大事なことはしっかりと勉強することが認知的スキルと、情緒的なスキルにも影響していくというところに私は関心を持つわけでありませう。リテンションの問題は最近、日本でも言われるようになってきましたが、しっかりと勉強させることはリテンションを高める。そういうことを聞きますと、ブラックユーモアのような気がするんですね。しかししっかりと勉強しないから困っているわけですね。これは教員の責任なのか、学生をブレイムすることなのか、難しいわけですが。

学生同士の交流にも教育の意味を見いだしておられます。学生同士の交流がリーダーシップの成長、public speaking に影響がある。文化的センスに影響がある。満足度、歩留り率にも影響している。学生の交わりをどちらかというとうち本来の問題ではないと考えてきたわけですが、そういうものが本質的な営みに積極的意味を持っているというご指摘であります。

Pryor 先生が最後におっしゃっているように、大学は何をしなければならないのかと問われる。その問いに答えるために学生の特性、インプットや学生間の交流の影響に注目せよといわれている。鍵になることはキャンパスに居住する経験が指摘されているわけでありませう。お話を伺って、全部もっともでありませう、調査結果に対して特に異存はないわけで、まさにその通りだと思うわけですね。

次に山田先生のご発表ですが。これまでの日本のアセスメント、学生調査の大部分が、知識、学業について行われているということをご指摘されています。Affective aspect、情緒的な面での評価が欠けているという指摘です。これは大変重要な指摘であると思います。なぜ重要かというとうち、アウトカムとは何かに関係しているわけですね。山田先生は研究の枠組み

を述べて、大学の条件、environment 等々に焦点をおく。大学の環境はどういうことに影響するかという問題意識を持っている。インプット、初期条件はどこまで考えるかを調査の一つの焦点としてお考えになっていることについて、私は重要だと考えております。

3人の先生方に共通しているは、アスティンの基本モデルがベースになっていることです。I E O, input, environment, output, 3つの領域に関する関係を取り上げて調査すると理解しております。その中で山田先生は構成員の大学への営み、involvement に焦点をおくとおっしゃっている。前のお二人の先生方のご発言にも重なります。学習活動における学生の参加、教員の関与等を調査する。大学の条件、環境と成果、アウトカムとの関係を調査する。これも重要なことであろうと思います。そういう調査の実質はそれぞれの課題に対する評価項目にあるわけですので、どういうふうに評価項目を設定しているかが焦点です。いくつかのことを山田先生はご紹介されましたが、全体として評価項目がどういう構成になっているかに私は強い関心を持っております

大事なことは、アウトカムというものをどう考えるか。Type of Outcome と Type of Data との関係ですね。どういうデータをとるか。どういうタイプのアウトカムを調査対象にするか。どういうタイプのアウトカムを考えるかというのは、大きく言えば大学論に関係するわけでありまして、皆さんがそれぞれ抱えている具体的な大学の条件、状況、学生のインプットに深く関係しているわけですね。そのへんをどう整理するか。山田先生はJCS Sをお使いになっていますが、その具体的な内容が知りたいと思います。数学のスキルはサイエンスの方がアートより強いというとはあたりまえですね。我々にとって直観的に明らかなことをデータで確認することに意味があるのだらうと思います。単に直観だけではだめなわけですから。面白かったのはコンピュータスキルの方が外国語の能力より優れている、評価が高い。これは何を意味しているか。外国語教育よりコンピュータ教育の方がいいということなのでしょう。そのへんでもう少しどういうことか考えたいと思います。

学生同士の交わりの方が、教員との関係より強い。ここに日本の大学の問題があるわけです。知識の習得レベルはその大学の入学難易度に深く関係していることになると、インプットがアウトカムになっちゃうわけですからそういう点では問題があります。

パブリック・スピーキングを取り上げて、パブリック・スピーキング能力は調査の結果では最低、low なんですね。そういうところに日本の大学の問題性が現れていると思います。日本の大学は結論としてインプット要因のみが問題になっている。それが日本の大学の問題の一つだとおっしゃっているわけです。

以上、3人の先生方のご報告を伺いまして、学生の学習をいかにサポートし、支援し、チャレンジするかということがこの調査の目的でなければならないと私も思います。山田先生もおっしゃっていましたが、調査のための調査ではなく、調査を組織的改善、大学改革に結びつけたいといけない。そこに重い困難、難しさがある。そういう視点から考えましていくつかコメントを付け加えさせていただきますと、調査を組織的改善に結びつける視点として、レンズを4つ上げられていますが、各レンズを通して見ることができるアウトカムは何なのか。そのへんのところの関係をもう少し知りたいと私は思いました。Pryor 先生の調査から

言えることは「学生を勉強させることが最善だ」ということになりますので、これは何をか  
いわんやということになります。大事なのは課外活動、コア・カリキュラーアクティビティ  
による情緒的な能力の育成を取り上げられています。ということは、大学のアウトカムとし  
て、そういうものが当然、公然と期待されているのだらうと思います。日本の場合もそうい  
う事柄がだんだん問題になってきていますが、私のような古い大学で育った人間にとっては、  
情緒的なものは付け足しであって、大学本来の活動とは関係ないという、そういう感覚が強  
いわけです。しかし、だんだんと大学が多様化してくる、ユニバーサルになってくるにした  
がって、情緒的な問題が重さを増してきている状況にはっきり注目し、正面からその問題に  
取り組まないといけないだらうと考えさせられました。即ち大学とは何か、大学は何ができ  
るのかということが一番中心的な問題だと思いました。

山田先生の報告の特徴はJCSSの調査を、複数大学を対象に実施していることでありま  
す。その結果を見ますと、私の見方が悪いのかもしれませんが、いろいろなアイテムについ  
てグラフがほとんど平行して、そんなに開いているわけじゃないですね。近接しております。  
大学間の差異があまり顕著に見えないで、平行していることは、私の解釈ですと、インプ  
ット要素が強いということですね。アウトカムに強い影響を及ぼしている。大学の environment  
はアウトカムに関係していないのではないかという気がするわけですが、そのへんをはっき  
り調査していただければと思いました。山田先生の報告では一つほど例が上がってしま  
したが、全体としてはアウトカムというものと environment の関係がもう少しはっきりさせる必  
要があるのではないかと思います。

その関連で言いますと、アスティンのモデルのIEOラインとIOライン、インプット＝  
アウトプット、インプットからアウトプットに向かうラインと environment 経由したIEO  
のラインとの差異が検証できるかどうかの問題になると思います。アウトプットに影響を  
与えるインプット要因は何か。単にセレクトィビティが成績に関係するということあまり面白  
くないわけですが、もう少しアウトプットに影響するインプット要因、environment factor を  
特定できれば、私ども実践家にとっては非常に参考になると思うわけです。そういう意味で  
先生方がお使いになっているそれぞれの調査様式、CSS、JCSSとかNSS Eとか、フ  
ァンデーションズ・オブ・エクセレンス・イン・ザ・ファーストカレッジ・イヤーという調  
査があると聞きましたが、そういう調査の内容は企業秘密なのですか、アメリカでは。その  
へんのところが企業秘密だと困りますが、どこまで私どもが知りうるのか、内容を知りたい。

もう一つは学生の成長を測定する方法が満足度調査、自己評価でいいのかという問題です  
ね。特色GPの審査でも教育効果の評価を、審査の留意点として取り上げていますが、ほと  
んど満足度調査を超えていない。何か別の方法があるのではないかと思います。アウトカ  
ム評価の方法はまだはっきりしていないと思います。アウトカムの評価をきちんとしようと  
すれば、アウトカムを限定するところになるわけで、このアウトカム、このアウトカムと特定  
しませんと、それを評価することは難しいわけです。「大学におけるアウトカムというのは限  
定できるのか？」というのが私の基本的な問いです。これは大学とは何かに関係しているわ  
けです。アウトカムを限定すれば、実効評価ができます。メディカルスクールの評価ははっ

きりしています。工学部の評価も JABEE がありまして、目標が決まっているので目標を達成すればいいとなるわけです。大学ということ考えた場合、アウトカムというのは全部、限定できるのかという問題ですね。そこに強い関心を持たせていただきました。

教育評価というのは総合的なんだろうと思います。総合的なものでなければならぬ。そうすると学生調査だけでは評価しきれないわけでありまして、その見通し、展望を、学生調査を超えて、何か私どもがしなければいけないことがあるのか。教育評価活動は F D だと私は言っているわけですが、教育の質の評価は評価に関するものの共同認識がなければできないわけですから、共同認識の育成、まさに F D でありまして、評価と F D の問題は切り離すことはできないと考えます。

もう一つ私は思いますことは、大学教育の質というのは、当該大学の教員の資質が本質的であります。先生方の資質が大事だと思うわけです。教員の資質に関する評価方法は特に日本では未発達でありまして、その方が大事だと思うわけです。そういう教員の資質に関する評価を学生成長の評価に結びつけるシステムの開発が必要だと思います。そういう視点から言いますと Swing 先生は 4 つのレンズを上げられましたが、私は 5 番目のレンズとして教員の資質、クオリティを追加すべきではないかと考えます。見方によっては先生の 4 つのレンズの中に教員の資質の問題も当然入っていると考えますが、あえて強調するために、第 5 番目のレンズとして教員のクオリティを考えないといけない。ただ教員の資質とアウトカムの関係を調べようとする時、教員のクオリティは何かは難しいです。即ち難しいことばかり言っているわけです。注文ばかりつけているわけでありまして、自分は濡れ手に泡で何かをつかみとろうとしているわけです。失礼な話ですけど。率直に言いますと、そういうことあります。

日本では大学評価は機能しておりません。極端に言いますと、いい評価を得た大学が社会的に高い評価を得るかということ、そんなことはないです。いい教育をしていれば学生はたくさん集まるか。そういう場合もありますが、いくらいい教育をしても学生が集まらない大学はたくさんあるわけです。大学評価が効果的に機能しない日本の大学の状況の中で、学生調査を問題にすることは、それより前に学生調査が意味を持ちうるような大学のあり方をまず考えないと、逆に言えば学生調査を通してそういうことが意味あるように大学を改革すると言え、そういうことですが、堂々巡りでぐるぐるまわっちゃいますけど、学生調査の前に日本の大学の体質を何とかしなければいけないのではないかとことを考えちゃうわけです。

インプットの問題に関連して、日本の大学が依然として学歴主義である。セレクトイビティだけで考えているという、そういう問題をどういうふうに解決するか。学生調査の結果を使って、日本の学歴主義を壊す、社会に対して問い掛けるといいう仕事も必要ではないかと思えます。以上でございます。